

「七里ヶ法華」の歴史地理学的研究

菊 地 利 夫

一、問題とその視点

房総半島の中部に、太平洋岸から東京湾岸にかけて、半島を東西に横断しながら七里四方にわたり、都市・村落のすべての集落における寺院はことごとく日蓮宗のみであり、他の宗教の寺院は一つも存在しないという地域がある。この地域を人々は「七里ヶ法華」とよんでいる。「七里ヶ法華」以外の房総ではさまざまな宗教の寺院がいろいろまじっていることにくらべて、「七里ヶ法華」はまったくの日蓮宗信仰地域であり、宗教地域として興味深い研究対象をわれわれに提供している。

房総半島は奈良・平安時代から真言宗と天台宗の信仰地域であった。鎌倉時代からこの中に浄土宗・禅宗・日蓮宗などの寺院が建立されてそれぞれの信仰地域をつくりあげた。とくに房総半島の南部に日蓮宗の発祥地として天津小湊町に清澄寺や誕生寺などがある。清澄寺は僧日蓮が新宗教として日蓮宗を創始したところであり、誕生寺は日蓮の出生地を記念して建立された寺院である。また日蓮宗の発祥地に関連して房総からたしかに日蓮宗の名僧が多く輩出

している。したがって全国的にみて房総半島は日蓮宗の勢力が強い地方である。日蓮宗の初期の発展は日蓮とその六老僧⁽¹⁾による房総・甲駿・越佐などに拠点があり、戦国時代、近世時代に日蓮宗はこれらの拠点から常陸・遠江尾張・北陸にひろまった。その他に中国・四国・九州にも布教されたが、日蓮宗の勢力範囲は東日本に圧倒的に強い。また鎌倉時代の新興仏教として共通の布教目標は古代からの勢力範囲として真言宗天台宗が強力に確保している京都を中心とする近畿に進出することであり、このことは新興仏教としての日蓮宗においても同様であった。したがって日蓮宗の寺院は関東・東海・北陸のほか近畿に多く集中している⁽²⁾。このような日蓮宗の勢力分布は、近畿に進出しては、真言宗天台宗の勢力に圧迫され、撃退されて地方に下ってそこで勢力回復をして近畿に進出するという過程をくりかえしたことから成立したものである。日蓮宗は既成宗教による圧迫と撃退を「法難」⁽³⁾といい、その回数も多く、日蓮宗はとくに法難意識が強い。日蓮宗の勢力範囲を全国的な立場からみれば、房総はその発祥地として特異性を持っている。しかし房総において日蓮宗の寺院が密集している地域は発祥地の清澄寺や誕生寺がある地方ではない。とくに本論でとりあげる「七里ヶ法華」は房総の中でも発祥地から数十料も隔てる場所に存在していることは注目してもよい。

文化圏の研究として「七里ヶ法華」をとりあげ、この問題意識と視点を明かにする必要がある。文化圏の一つとして宗教地域をとりあげるのであるが、とかく宗教であるが故に名僧の布教活動と信徒の信仰が中心となりやすく、多くの教義経典や寺院の縁起が研究の道すじに山積している。これを地理学の理論と方法で真正面から分析して解釈する歴史地理学的研究も少くなかった。これも一つの問題意識であり、一つの視点であろう。これは宗教的事象の地理的解釈である。本論では宗教的事象を中核として他の諸事象を結びつけて宗教地域を考察する方向に問題をとら

げることにする。これは文化圏の形態的研究である。文化圏の研究として文化圏周圏論や文化伝播論などがあるが、これらを参考にしながらも、静態的研究よりも動態的研究を強くおしだそうとしている。それは文化地域の存在状態の研究よりも文化地域の形成過程の研究に重点をおくことになる。動態的研究とは文化地域が形成され、発展・継続し、やがて崩壊し、他の文化地域にいれ替ること、文化中心地から文化が伝播して文化地域を拡大し、他の文化地域に変化を与えたり、他の文化地域を縮小したりすることなどである。そのためには文化接触としての文化変容や文化の入れ替えなどの現象が中味となる。

「七里ヶ法華」の動態的研究とは真言宗・天台宗の信仰地域が日蓮宗の信仰地域に入れ替え現象が発生して別の宗教地域が形成されたことの研究である。この入れ替え現象は戦国時代に発生した。また「七里ヶ法華」は戦国時代形成されてから今日まで約四百数十年間も継続している。この期間にわたって他の宗教の寺院を侵入させず、宗教地域が維持されてきた継続現象の研究である(4)。今日によく「七里ヶ法華」内の寺院に無住の寺院があらわれているが、この状況を「七里ヶ法華」の崩壊現象といえるかどうかの解釈もある。本論においては、七里ヶ法華の形成問題に中心をおき、その継続崩壊の問題についてはふれる程度にとどめたい。

(1) 開祖日蓮の高弟に、日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持がいる。これらを六老僧という。六老僧は各地に日蓮宗布教の拠点となる寺院を創建している。房総半島には日向が「七里ヶ法華」になった茂原市の藻原寺の初代住職と日蓮宗大本山身延山久遠寺の住職を兼ねている。日向は安房郡の生れ、一三二三年(正和三)寂。

(2) 日蓮宗の一派に顕本法華宗がある。この宗派は「七里ヶ法華」の中の寺院の主力である。顕本法華宗の寺院の全国的分布は北海道五三、東北地方一九、関東地方一八一(このうち千葉県に一五〇)、北陸地方一二二、東海地方五四、近畿地方一一

九、中国地方二六、四国地方二、九州地方三となっている。日蓮宗の他の宗派の寺院の分布も東日本、近畿に多く、西日本にすくない。

(3) 開祖日蓮は為政者領主からしばしばの弾圧を加えられたが、日蓮宗の一派の顕本法華宗だけを見ても、近世の期間中に法難とよばれる事件は、慶長法難、寛永法難、万治法難、寛文法難、元文法難などがある。いずれも幕府から顕本法華宗の当時の指導的地位にある高僧が流刑、死刑などに処せられた事件である。日蓮宗全体として鎌倉時代にまでさかのぼると、このような法難がさらに多くなる。

(4) 「七里ヶ法華」を近世に継続させた勢力を僧侶と信徒との関係からの調査と報告は、千葉県本納町柴名の蓮華寺の住職・中村孝也氏が多くのパンフレットを発行している。

二、房総半島の寺院の分布と日蓮宗寺院の分布

(1) 各宗の寺院の分布の特色

房総半島の寺院数は二九〇五（昭和四〇年・千葉県宗教法人名簿）、そのうち古代からの真言宗の寺院は一〇九八（三七・七％）、天台宗の寺院は三七〇（一二・七％）である。これに対して鎌倉時代からの日蓮宗の寺院は七四四（二五・六％）、禅宗の寺院が四〇九（一四・〇％）、浄土宗の寺院は一八二（六・二％）、その他が一〇二（三・八％）となっている。

これら宗教別の寺院分布にはかなりの特色がみられ、それぞれの宗教の布教活動の結果を示している。都市には各宗教の寺院が混在しているが、村落には真言宗か天台宗かいずれかの寺院が主となり、そこに鎌倉時代の宗教の寺院がようやく入りこんでいる。各宗教の寺院のうち、真言宗の寺院が房総半島全体にひろがっている。天台宗の寺院は房総半島の東部（両総台地の東部、九十九里平野、夷隅山地）に多い。しかし天台宗の寺院の分布地域の各所におい



第1図 房総半島の寺院の分布

て日蓮宗の寺院の密集地があり、とくに「七里ヶ法華」で天台宗の寺院分布地域を切断している。鎌倉時代の新仏教の寺院が進出する以前には、房総半島は西半分が真言宗の寺院地域であり、東半分が天台宗の寺院地域であったと思われる。これらに対して、鎌倉時代の仏教は、禅宗の寺院が利根川沿岸や東京湾岸の都市に点在して、一つづきの分布地域を形成するまでにはいたらない。浄土宗の寺院は各都市にみられるほかは外房・内房の漁村に点在したり、利根川沿岸の都市・村落に点在している。

各宗教の寺院分布に対して、日蓮宗の寺院の分布はいちじるしい特色を示している。それは集団的密集地を島状に形成していることである。小範囲の密集地は市川市と多古町・その周辺と勝浦街道・夷隅川流域である。またとくに大きな範囲の密集地が目立つ。それは東金市と山武郡の町村、茂原市と長生郡の町村、千葉市や市原市の一部などが一団地となっている。ここが「七里ヶ法華」である。この「七里ヶ法華」には日蓮宗の寺院が二七四、この範囲には他の宗教の寺院はなく、文字通り七里四方が日蓮宗信仰地域となっている。

「七里ヶ法華」は日蓮宗信仰地域であるが、日蓮宗内の宗派別からみればその分布構造は単純ではない。日蓮宗には多くの宗派がある。「七里ヶ法華」においては日蓮宗・法華宗本門流・法華宗陣門流、顕本法華宗などの寺院があり、それぞれが「七里ヶ法華」の中で特定の範囲に分布している。日蓮宗の寺院は「七里ヶ法華」の西部に多く、両総台地にきざみこむ侵食谷の水田地帯であり、そのうちでも茂原市とその周辺、東金市とその周辺が密集地となっている。「七里ヶ法華」の中の日蓮宗寺院の二つの密集地は、前述の房総半島内の市川市、多古町とその周辺、勝浦附近と夷隅川流域とともに同じ宗派の日蓮宗寺院の密集地である。「七里ヶ法華」の東部には顕本法華宗の寺院が多くここは九十九里平野の農村・漁村である。しかし両総台地の土気（千葉市）や東京湾岸の浜野（市原市）などに点々

とある顕本法華宗の寺院は、本論では重要な意味を持つている。また法華宗本門流の寺院は小數ながら、茂原市と長生郡の海岸に密集している。このような「七里ヶ法華」内の日蓮宗各宗各派別の寺院分布は「七里ヶ法華」の形成に重要な役割を果していることは後述するところである。

「七里ヶ法華」の寺院の分布構造については、平面的な寺院の分布のみならず、寺院格式による階層構造をも考慮する必要がある。寺院格式としては最高の大本山（総本山）が日蓮宗では身延山久遠寺であり、顕本法華宗では京都妙満寺であつて、これらの大本山は房総にはない。しかし「七里ヶ法華」の顕本法華宗では中本山触頭が一〇ヶ寺もあり、その下位のの中本寺が七ヶ寺、小本寺が二ヶ寺がある。そしてこれらの寺院格式が高いものは、本寺としてその末寺や孫末寺を階層的に系統づけている。この中本山触頭は「東上総十箇寺」とむかしからよばれ、全国の顕本法華宗の寺院のなかでも格式が上席である。東上総十箇寺の末寺孫末寺は次の通りである。

寺名	集落名	開祖年代	近世の寺領	末寺数	孫末寺数
善勝寺	土気	一四八八年	五〇石	二一	二四
本寿寺	土気	一四八八年	三〇石	二〇	五
本漸寺	東金	一五二一年	三〇石	二七	一二
西福寺	東金	一四七九年	三〇石	一八	五
本国寺	宮谷	一四七一年	一五石	二三	二二
蓮照寺	土気	一四九六年	一〇石	一四	九
妙徳寺	北之幸谷	一五〇四年	一五・八石	六	一

本松寺	松郷	一四九五年	一〇石	一二	一
法光寺	田中	一四八九年	一八石	三	一
蓮福寺	本納	一五六九年	一〇石	一四	二

この寺院格式や本寺と末寺との階層的構造はいかに形成されたか、またいかなる機能を持っているかは、本論においてとくに論じない。また表における寺院の開基の年代は多くは真言宗・天台宗の寺院として古くから創建されていたものが、「七里ヶ法華」の形成期に顕本法華宗に改宗した年代である。寺領石高の多い善勝寺・本寿寺は土気領酒井家の壇家寺であり、本漸寺・西福寺は東金領酒井家の壇家寺である。

「七里ヶ法華」の名称は、「いつ」・「誰が」よびはじめたものかはわからない。文献的には明治二二年春の「上総町村誌」(5)にでていいる。さらにさかのばれば中村国香(宝永六―明和六)の著「房総志料」に「七里ヶ法華」の範圍を記しているのもつとも古い。またいかなる社会階層がこれをよびはじめたものかは文献からいまだ明らかにできない。日蓮宗の僧職たちはこの地域を「東上総」とよび、その範圍は必ずしも「七里ヶ法華」の地域とは一致していない。また日蓮宗各派の信徒は多くの宗派にわかれ、「七里ヶ法華」という地域住民の全体がまとまった宗教活動を現出したこともない。「七里ヶ法華」とはその形成期に領主酒井氏が名づけたものでもなく、日蓮宗信徒から他宗教の信徒や政治的支配者に対する示威的な呼称としてよびはじめたものでもないようである。おそらくは幕府の代官、とくにこの地方を近世に支配した東金代官所などからでた呼称ではないだろうか。東金代官がこの地方の寺院に幕政の末端機関として寺院を利用し、各寺院に寺領を与えるときに、日蓮宗の寺院のみがあまりにも広く分布していることに驚いて名づけたものであろう。これが近世の農民信徒に用いられ、近世末明治期の文献に書き伝えられたも

のであろう。

(5) 上総町村誌・明治三二年・小沢治郎左衛門著に「長柄郡東部より山辺郡を通じ、武射郡の大半に至る縦横七里の間、寺院悉く日蓮宗たり。里俗之を七里ヶ法華と称す」とのべ、村名と寺院数二七四ヶ寺を書きあげている。また南総酒井伝記(房総叢書)に「これぞ上総国七里法華の基とはなれりける」と記してある。また中村国香著(宝永六―明和六年)の房総志料(房総叢書)に「本州の俗に七里法華といえるは大半長柄、山武二郡、縦横六七里の地を指いう也」とのべている。

三、戦国大名酒井氏の勢力拡大と「七里ヶ法華」の形成

(1) 「七里ヶ法華」の形成

七里ヶ法華の形成とは古代からの真言宗・天台宗の信仰地域が鎌倉時代の日蓮宗の信仰地域に変化したことであり、宗教という文化の入れ替え現象である。この宗教の入れ替え現象は、日蓮宗側からみれば真言宗・天台宗の信仰地域へ日蓮宗の勢力の拡大として、日蓮宗の当時の僧職の活動が、他の宗教の寺院への折伏による改宗や日蓮宗の新寺院の創建などをかぞえあげられる。これは「七里ヶ法華」の形成の事実関係としてはその通りであるが、このようない蓮宗の拡大を容易ならしめたものは、この地域を領有した戦国大名の酒井氏が発令した日蓮宗への改宗令であった。むしろ文化接触としては文化変容現象より激しい文化入れ替え現象としてあらわれたのは、戦国大名の政治権力と軍事力という強制によるものが大きかった。したがってこの戦国大名の勢力が拡大していく過程にしたがって、入れ替え現象がひろがったものであり、この戦国大名の領土の境界の外側では入り替え現象が衰え、境界の外側から真言宗、天台宗の勢力が日蓮宗の進出を拒んでいる。

ここで戦国大名の酒井氏の勢力の拡大について簡単にふれておこう。酒井氏は一四七四年（文明六）から興り、五代・一六六年間つづき、一五九〇年（天正一八）に滅亡した。戦国時代の房総半島は、北部に千葉氏や小田原北条氏の勢力範囲があり、南部に安房里見氏や西上総に武田氏の勢力範囲がひろがり、酒井氏はこの南と北の勢力の境界地帯にその領土を拡大したが、酒井氏の南北の大勢力に対する関係はつねに流動的であった。酒井氏初代の定隆は、東金街道の中野を根拠地として、ここに一四七四年から一六六年間も居住し、千葉氏の一族の原氏に依存しながら勢力をひろげ、五四才のとき、土気城を修築して酒井領の根拠地とした。この年が一四八八年（長享二）であった。酒井氏の領土はこのころから土気を中心として両総台地から西は東京湾岸まで東は九十九里平野の南にひろまっていた。

この一四八八年に酒井定隆が日泰上人を迎えて日蓮宗改宗令を出して領内の寺院をことごとく日蓮宗に改宗させようとした。「七里ヶ法華」の形成はこのときからはじまる。

此度御領内村々 思召を以て 法華宗に被仰出候 尤是迄法華宗の所は其儘に可被置 外宗之義は不残日蓮宗に可相成 若違背之者於有者 可為曲事者也

長享二年五月十八日

奉行 栗原助七郎

宮島伝七郎

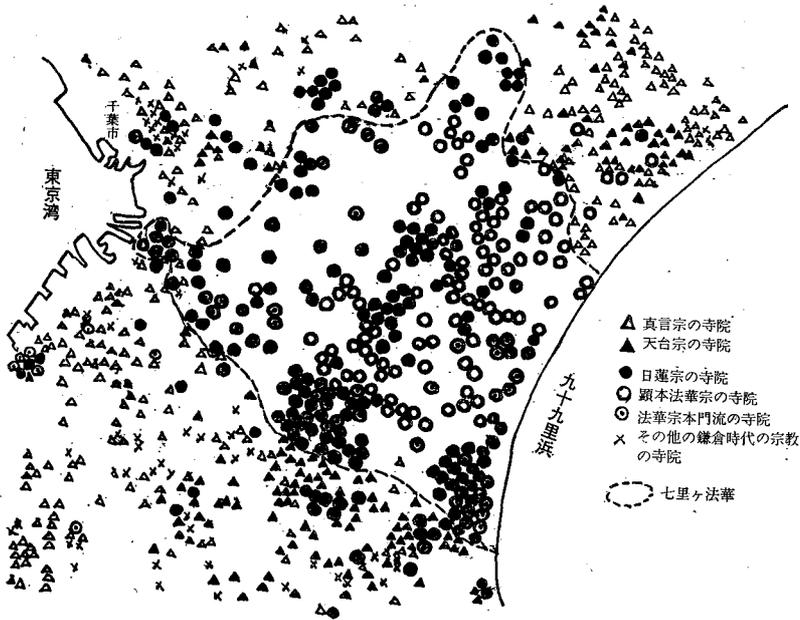
右村々名主中

この改宗令は県史、多くの郡史や市町村史に引用されているが、私はこの原資料をいまだ被見したことはない。

このときから酒井氏は禪宗から日蓮宗に改宗し、日泰上人とのかねてからの約束通りに領内に日蓮宗の改宗令を発令したのである。日泰上人は一四八八年に土気に本寿寺を創建し、さらに酒井氏の命令で土気にある真言宗の寺院も

日蓮宗に改宗して善勝寺となり、さらに一四九〇年（延徳二）に日泰上人は中野に本成寺を創建している。日泰上人の宗派は日蓮宗といっても顕本法華宗であり、本寿寺・善勝寺、本成寺は顕本法華宗の寺院であり、酒井氏の改宗令によって領内の真言宗、天台宗の寺院はすべて顕本法華宗の寺院に改宗することを強制され、以前からある日蓮宗の寺院はそのままであったことに注意する必要がある。日泰上人は東京湾西岸にある武蔵国品川（東京湾西岸）の本行寺の住職であり、これよりさきの一四六六年（文明元）に（東京湾）東岸の浜野（千葉市）に本行寺を開き、一四七一年に北生夷（市原市）に本満寺を創し、一四八二年に静岡県三島に本妙寺を創建している。かくて日泰上人は東京湾の東と西を船で往復して顕本法華宗を布教したのである。この船上で酒井定隆が千葉氏の一族の原氏を尋ねる旅行中に日泰上人とめぐりあったという。この船上で日泰上人の法力と識見に感服した酒井定隆は、将来に大名となったとき領内を顕本法華宗にすることを約束している。この日泰と定隆のめぐりあい伝説は、「下総国浜野郷如意山本行寺縁起権大僧市日泰聖人行状」にのべられている。しかしこの縁起ははるかに後代の天明年間（一七八一—一七八八年）の作である。

「七里ヶ法華」はこの改宗令によって一挙に形成されたと一般的には考えられているが、これは誤りである。「七里ヶ法華」の中に現存する寺院は二七四であるが、このうち顕本法華宗の寺院は九九ヶ寺であり、残り一七五ヶ寺の大部分は日蓮宗の寺院であり、一部が法華宗本門流の寺院である。顕本法華宗の寺院のうち、改宗令以前のもは三ヶ寺、改宗令から酒井氏滅亡までの一〇五年に真言宗、天台宗から改宗した寺院は六七ヶ寺、近世になってから創建された顕本法華宗の寺院は二七ヶ寺である。また日蓮宗や法華宗陣門流の寺院の中にも近世に創建された寺院もある、酒井氏の領有時代に他宗教の寺院が顕本法華宗に改宗することは、酒井氏の領内の旧豪族に対する征服が進行するに



第2図 「七里ヶ法華」の寺院

したがって、その改宗の実績をあげることができたのである。初代定隆が土気城を長男に譲り、東金城を修築して次男とともにここに移り、酒井領を土気酒井領と東金酒井領に二分したのは一五二二年（大永二）であった。土気酒井領は土気を中心として両総台地から東京湾岸に、東金酒井領は東金を中心として九十九里平野から太平洋岸に分かれた。このときから九十九里平野の他宗教の寺院が顕本法華宗に改宗したり、旧豪族がその寺院を知行地に創建したりすることが増加した。とくに旧勢力の地方豪族で離反なき畠山氏の大関城（東金市福岡の依古島）の攻略が一五三四年（大永六）に行われ、また黒川大膳の本納城（本納町）の攻略が一五六九年（永祿一一）に行われた。これらの旧勢力が一掃されてから、その領内の真言宗、天台宗の寺院が破却または改宗させられた。こう

してようやく酒井氏の領内に「七里ヶ法華」が形成されたのである。

(2) 宗教の入れ変え現象の中心とその方法

文化地域の形成には文化中心地から文化周辺に伝播させる力、ここでは改宗させる力が明かにされなければならぬ。「七里ヶ法華」を形成した中心地と改宗機能はいかなるものであったか。それは宗教的中心地と日蓮宗の僧侶の改宗運動である。宗教的中心地は「七里ヶ法華」内の日蓮宗、顕本法華宗の特定の寺院であると一般的には考えられるだろう。しかし酒井家の壇家寺の本寿寺、善勝寺や本漸寺・西福寺が改宗運動の中心となったという事実も明かではない。「東上総十箇寺」は顕本法華宗の上席の寺院であるが、「七里ヶ法華」全体をまとめる勢力でもなく、全体にまとまった一つの運動にもりあげたこともない。これらは本寺に末寺・孫末寺という階級的関係で小集団としての組織にとどまっている。「七里ヶ法華」を形成し、拡大し、これを維持して、中心地となりながら中心の機能を果たしたのは、寺院ではなく、政治的権力としての東金城と土気城の領主である。したがって顕本法華宗の寺院に改宗することは、酒井氏の領土外に及ぶことはまれであった。「七里ヶ法華」と戦国大名酒井氏の領土は、その地域範囲が重なりあっている。

改宗令による入れ変え現象は、一般には平穩に進行したと考えられているが、これは誤りである。日蓮僧や顕本法華宗の僧侶が他宗教の僧侶を折伏して改宗させた場合もある。しかし基本的には領主の政治権力と軍事力によって改宗させられたものである。真言宗・天台宗の寺院のうち、本尊を持って酒井氏の領土外の末寺に逃げのびた寺院もある。本納町七渡の真言宗竜堂寺は殖生郡の報恩寺に本尊を移した。本納城が落城し、改宗反対の十数人の僧侶は処刑された。茂原市二宮ノ荘の聖人塚はこれを埋葬した所である。旧田中村の真言宗西光寺は寺院が破却されたが、再建

されて顕本法華宗の法光寺となった。改宗した寺院では、仏像は海中に投げすてられ、經典・仏具は土中に埋められた。後年になってから、九十九里海岸の沖合から貝殻のついた仏像が漁師によってひきあげられたこともある。大網白里町の四天木に祀られている四天王像や成東町の不動明王像などはこの例である。また各地にみられる御経塚とか経文塚は天台宗・真言宗の經典・仏具を埋めた所である。また酒井氏に臣属した豪族は豪族屋敷村の中に日蓮宗または顕本法華宗の寺院を創建した。山武町の酒蔵は酒井氏の家臣の古川氏の豪族屋敷村であるが、その集落内に古川氏が日蓮宗の寺院を建立している。

(3) 「七里ケ法華」と「固まり法華」

「七里ケ法華」に現存する寺院は顕本法華宗の寺院が九九であり、これは酒井氏の改宗令によって真言宗、天台宗の寺院が改宗したものが、改宗令後に創建されたものである。残りの一七五ヶ寺のうち、日蓮宗の寺院が四〇ヶ寺、法華宗本門流の寺院が三五ヶ寺である。日蓮宗の寺院は地図でみれば、両総台地に点在しているのは集落が少くないからであるが、九十九里平野では茂原市と東金市には集团的に密集している。また法華宗本門流の寺院も茂原市とその東部の海岸の村落に密集している。これらの寺院集団地は「固まり法華」とよばれている。

「固まり法華」の起源は「七里ケ法華」の形成よりはるかにさかのぼる。「固まり法華」は鎌倉時代から室町時代にかけて開祖日蓮や、その高弟によって基盤がつくられ、戦国時代から近世にかけて拡大したものである。茂原市とその周辺に日蓮宗の寺院が三〇余も密集している。その起源は開祖日蓮が領主齋藤兼綱の帰依をうけて、一二五三年（建長五）に藻原寺を建て、六老僧の一人の日向を初代とした。藻原寺を中心として周辺の真言宗、天台宗の寺院で日蓮宗に改宗するものがあり、また藻原寺の末寺が酒井氏時代に増加した。茂原市の鷲山寺は一二七七年（建治二）

にこの地方の豪族の小早川内記の援助の下に僧日弁（法華宗本門流）によって創建された。その末寺は茂原市と海岸の村々に多い。これらの末寺には鷲山寺八世の八幡の折伏によって一五一八年ころ真言宗の寺院が改宗したのもあるが、鎌倉時代にはすでにかなりの法華宗本門流の寺院が増加していた。東金市とその周辺の台地に日蓮宗の寺院が二〇余も密集している。戦国時代以前に真言宗の寺院が日蓮宗に改宗したものであるが、誰が何時ごろ改宗させたものかはわからない。

「固まり法華」は「七里ヶ法華」よりも古い。房総半島には固まり法華は他に三ヶ所を発見できる。一は市川市でここに日蓮宗の寺院が約五〇もある。ここは開祖日蓮が一二五四（建長六）にこの地方の豪族富木忍常の保護によって妙連山法華経寺を創建し、また豪族太田乗明によって正中山本妙寺を創建した。その後一寺として正中山法華経寺とした。市川市に「固まり法華」が成立したのは法華経寺三世の日祐が一三一九年（元応元）にさかんに付近の真言宗、天台宗の寺院を改宗させてからである。

二は多古町とその周辺に日蓮宗の寺院が四〇余もある。ここは開祖日蓮が一二六四—一二七七年（文永年間）に多古地方に布教し、真言宗の法王山顕実寺を日蓮宗に改宗させた。この「固まり法華」はとくに一五八五年（天正一三）飯高城主の平山刑部の帰依でその領内に日蓮宗の布教が許され、とくに関東八壇林のうち、最初の飯高壇林がここに建設され、学僧として集る者が多く、周辺の真言宗・天台宗の寺院が折伏されて改宗したり、日蓮宗の寺院が創建されたりした。

三は勝浦市の勝浦街道と夷隅川流域には日蓮宗の寺院が多く、勝浦街道には約五〇の日蓮宗の寺院がある。この「固まり法華」は何者の布教によって何時ごろに形成されたものかはわからない。しかしここは日蓮の誕生地の小湊

や彼の修業した清澄山などへの交通路にあたることから、日蓮の布教によって、この付近に多い天台宗の寺院が日蓮宗に改宗して「固まり法華」をつくりあげたものであろう。

「固まり法華」は「七里ヶ法華」の形成前における日蓮宗の改宗地域である。そこは経済的にみれば当時の重要な穀倉地域であり、主要な交通路である。そして開祖日蓮の布教地であり、しかも地方の豪族によって保護されて布教したことが「固まり法華」の形成の根底となっていることを強調したい。「固まり法華」が小地域であることは地方の豪族の小さい勢力範囲に限られたからである。「七里ヶ法華」のような大地域の形成には戦国大名という大きい勢力範囲を支配する政治権力に保護される必要があった。この点、酒井氏の保護を受けないときの日泰上人による顕本法華宗の布教範囲は、東京湾の東西両岸に二、三の寺院を建立したのみであるが、酒井氏の保護によって顕本法華宗が両総台地から九十九里平野の南半一帯に拡大した。このことから宗教地域は政治権力との結合がいかに重要であったかを承認せしめるものである。

また戦国大名酒井氏はこの「固まり法華」の存在を領土統治策に巧みに利用したことに注目しなければならない。酒井氏の権力構造は地方豪族を武力で征服して、自己の家臣を領土内に知行を与えて旧勢力といれ変えたものではない。従来まで割拠していた地方豪族をそのまま承認して、その上に酒井氏が戦国大名として君臨した。また酒井氏の家臣団のおもな部分は旧豪族よりも村落の上層農民の名主層であった。このように新たに編成された家臣団は宗教的にみれば「固まり法華」を形成していくつかの集団地をつくり、領内に群居していた。酒井氏はこの「固まり法華」の家臣団と共通的な精神的紐帯をつくるために自らが禪宗から日蓮宗に改宗し、さらに領土全体に統一性を与えるために改宗令を発して、領土を七里ヶ法華につくりかえたのである。「七里ヶ法華」が形成されるには「固まり法華」

の存在を重視すべきである。

四、「七里ヶ法華」の継続現象

「七里ヶ法華」という宗教地域が継続していくためには宗教的条件と宗教的条件が強力でなければならない。宗教的条件としては政治的・軍事的原因が考えられるだろう。また宗教的原因としては僧侶の活動と信徒信仰が考えられるだろう。

戦国大名の酒井氏が、禅宗の信徒であったが自ら顕本法華宗に改宗し、さらに領内の寺院を日蓮宗各派に改宗することを強制したのは、定隆が日泰上人に対する帰依だけからでは説明できない。寺院はしばしば防禦的施設ともなり軍事的拠点でもあった。酒井氏は顕本法華宗に改宗した寺院に梵鐘を寄進したという。この鐘は日常生活の時刻を告げるものであったが、さらに軍事的には早鐘を打ちならして戦闘要員の非常集合の合図として利用した。「七里ヶ法華」には改宗令後に酒井氏に臣従する豪族や郷土が多い村落に創建された寺院がすくなくはない。また酒井氏の家臣団は早くから土着していた豪族や村落の上層農民の名主層である。これらの家臣団の精神的統一に日蓮宗の信仰を利用したといえる。宗教力が強く人心を支配していた中世、戦国時代に精神的統一のために宗教を利用したことは賢明であった。仏教でも真言宗や天台宗は鎮護国家の貴族仏教であり、鎌倉時代の新仏教の禅宗は武士階層に適しても農民の名主層までの信仰を集められなかった。同じく大衆仏教といっても浄土宗は厭世的であった。日蓮宗は法難意識が強く、排他的であり、攻撃的であり、戦国時代を積極的に生きぬくためには効果的であり、典型的な大衆仏教であった。

宗教的原因として信徒の信仰が僧侶の宗教活動の受け入れ側として重要である。仏教が大衆化したのは浄土宗や日蓮宗やその他の鎌倉仏教の特色である。酒井氏の家臣団が大衆化した仏教でなければならなかった根拠は、その家臣団の性格による。酒井氏の家臣団はようやく農民の階層が分化してきた名主層が多かった。「東金城明細記」(6)によれば、東金領酒井氏の家臣は「東金城諸士七百騎地戦に千余騎余」と誇称している。この「諸士」といわれる武士は約二一〇名、その他は徒歩級二一一名、足軽三八〇名、中間五〇〇人と記している。これらの「諸士」は七〇余の集落に居住している名主層である。このうちおもな者は豪族屋敷村をつくり、その支配者である旧勢力の地方豪族であり、多く被官百姓を率いている。徒歩、足軽、中間とはこれらの被官百姓が主力であろう。また土気領酒井氏の家臣団も、「土気古城再興伝来記」(7)によれば、家中譜代・外様の合計として一九四名を列記している。「東金記録」(8)によれば、これらの「諸士」について「幕下の郷士は農業致したるよし 馬は野馬をつれて来る事故 騎馬は多きよし也」と説明している。家臣団の上層の「諸士」でさえも、郷士という名をもってよばれた村落の上層農民であった。酒井氏に攻略された旧勢力の黒川大膳の本納城には、戦闘のため「城付百姓一〇〇余人」(9)といった場合も、この郷士に相当する名主層であろう。大衆仏教としての日蓮宗各派はこのような名主層にまでようやく滲透できたのであった。

戦国大名酒井氏は滅亡した。「七里ヶ法華」を維持して継続させていく政治権力は消滅した。それでも「七里ヶ法華」は厳然として継続し、近世の新田開発によって村落を増加すれば、そこに日蓮宗の寺院が建立された。近世を通して「七里ヶ法華」を継続させた要因の最大なるものは、江戸幕府の寺院制度である。幕府は寺院を幕政における末端機関として、寺院に寺領(10)を与え、経済的に保護し、宗門人別帳の作成をさせ、寺院を人口調査、管理機関とし

た。もちろん日蓮宗の一派には不受不施派のようにこの寺領を受けることを拒絶したものもあるが、これは例外的存在である。村落人口が壇家寺として寺院によって統一・管理されることによって、「七里ヶ法華」の日蓮宗の信徒はいまや上層農民だけにかぎらず、全人口に日蓮宗は滲透することができた。

「七里ヶ法華」の継続現象にはこのような改宗・制度のみをとりあげることは一面的であることはいうまでもない。日蓮宗各派の高僧の活動は「七里ヶ法華」内の寺院を中心として行われた。しかし「七里ヶ法華」全体をまとめあげた宗教的運動はみられなかった。また「七里ヶ法華」の一部の信徒を含めて日蓮宗僧侶は幕府に弾圧されたが、潜在的にその信徒集団が発展したものもある。例えば「法華切支丹」・または「上総新門徒」とよばれる信仰集団である。これらは「上総内証題目講」とよばれる組織をつくっていた。

一般に文化地域は政治地域や経済地域よりもながく継続し、容易に崩壊はしない。「七里ヶ法華」はその形成からすでに四百数十年を経過している。

本論において「七里ヶ法華」の寺院の経済的基盤についてふれることをさけた。近世の寺院は幕府による寺領がもな経済基盤であるが、戦国時代の酒井氏は寺院にどれだけの寺領を与えたか、また寺院はいかに寺領を管理、経営したか、寺院格式と経済といかなる関係にあったかななどの問題の解明も「七里ヶ法華」の研究には必要である。またとくに「七里ヶ法華」の形成、継続には日蓮宗各派の宗教活動や信徒の生活上にあらわれる特色などの解明も必要であるが、今回ではふれず、今後の問題として残した。

(9) 本納町史、本納町社会教育委員会

(10) 寺領として与えられた石高は、上総十箇寺は中本山という格式であるから、一般の寺院よりも多く、一〇石以上である。とくに戦国時代の酒井氏の壇家寺は五〇―三〇石である。この寺領は耕地を与えられたのか、米の現物を与えられたのか不明である。耕地を与えられたならば、その農業労働力が必要であるが、この点も明かではない。酒井氏時代では常在山妙徳寺(東金市北ノ幸谷)は酒井定隆の隠居寺であり、その寺領は二八〇石であったが、近世には寺領が一五・八石となっている。また西福寺の寺領は近世に本漸寺の寺領をもふくんでいたが、天正二〇年に六〇石を与えられている。この面積は田畑七町九反十九歩であった。近世の寺領は耕地を与えられたと思われる。その場合に寺領の農業経営を明かにしなければならぬが、本論ではふれなかった。

(11) 上総内証題目構とは俗に「法華切支丹」とか「上総新門徒」とよばれていた。これは顕本法華宗の寺院の信徒の内部の信仰すなわち内信者、内信である。各集落単位の信徒集団があり、日蓮、日什の書を読める農民を「譜代または導師元」とよび、信徒の葬式には寺院より先に導師元が引導を渡し、その後寺院で埋葬した。内証題目というのは家の納戸か天床裏で題目を唱える「納戸題目」と、母屋の離れで唱える「小座の題目」とがある。この信仰は天和二年のうちには一四〇〇人の信徒があり、元禄五年には一九〇〇人に拡大している。信徒は寺院に所属しなかったから、寺院と村役人に圧迫された。この宗派の僧侶は不受不施派に属した。この宗派は幕府から強い弾圧をうけた。(中村孝也述パンフレット)

(12) 「固まり法華」は「上総町村誌」(明治二二年著)に「本州東部地方の俗、日蓮宗に傾き、七里ヶ法華或は固まり法華の称呼あり」とのべられている。郷土史家清水浦次郎著「東金史話」(昭和三四年)には七里ヶ法華と固まり法華を区別し、その形成は六老僧の布教と関連あったことをのべている。